

## 高校卒業 50 周年記念の集いから

10月「体育の日」を含む連休に郷里(長野県)で高校卒業 50 周年記念の大会が開かれました。卒業から実に半世紀——紅顔の美少年も今や 68 歳から 69 歳となり、白髪や頭の薄くなった“じいじ”に変貌。会場は 1泊 2 日でゆったりと身体も癒せる母校近くの温泉となったのでした。

記念の式典を終えると懇親会に入りました。酌み交わす酒の量が進むにつれて、いつしか「オレ」「オマエ」やあだ名で呼ぶ高校時代に戻り、談論の止まるところがありません。自分も禿の進み具合はかなりのものですが、周りを見るとピッカピカに近い人もいて、妙な安心感を抱いたものでした。

お互いの高齢化に比べて、驚いたのは恩師がほとんど変わっていないこと。出席していた恩師の一人は、自分たちが 17 歳のころ 30 代の前半でした。当時すでに禿げていたせい、はるか“大人の世界の人”との思いが強くなりました。ところが、現在は参加している“生徒たち”とほとんど容貌は変わらないのです。若年期と高齢期の肉体的特徴の違いからなののでしょうか。

集いには地元の伊那谷一帯を初め、関東、中部、関西方面などからも駆けつけてきました。同期生の多い関東ではふだんの連携も活発で、さまざまな同好のサークルがあります。囲碁、俳句、陶芸、ゴルフ、それに「歩こう会」など。なかでもこの「歩こう会」では、「明年は古希富士登山を」と 1 年ほど前から訓練を開始。比較的低い山から中度の山に登り鍛錬、この 8 月には海拔 3,030m の南アルプスを完走。意気軒昂な姿には大いに刺激されたものです。

一方で、こんな意義ある集いに参加できなかった仲間の消息も気にかかりました。参加したのは 80 余人。当時の在校生の 3 分の 1 です。しかも、式典の中で黙祷を捧げた物故者が 31 人と在校時の 1 割を超えているのには愕然とさせられました。



幹事が送った案内の返信には次のようなものがありました。

「長く患っており体調的に参加はきびしい」「つれあいが痴呆になりその看病で手が離せない」「まだ現役で仕事中、2 日の連休を取るのは難しい」「残念だが別途どうしてももの予定が入っている」・・・等々。なかには、もともとこうした集まりが好きでないという人もいたようでした。

さらに出席はしていても、週に何回も透析に通っているという仲間もいて、健康でこうした集いに参加できるのは最高に恵まれた人なのだ、との思いを深くしたものです。その意味では、自分も現時点に限っては恵まれた一人と言えるかもしれません。でも、人生、いつ、何が起こるか分からない。そのためには、何があっても崩れない信仰を軸に人生を切り開いていくこと、その上で少しでも周囲の人の支えや力にもなっていきたいと改めて決意したものでした。

「人のために火をともしば我がまへあきらかなるがごとし」との仏教の教え(日蓮大聖人の御書)そのままに——。